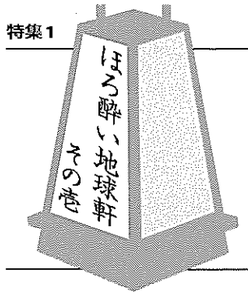


新しい研究構想で盛りあがる

東アジアからインド洋に拡がる 自然と文化の綾を再発見しよう

話し手●安成哲三（地球研所長）＋石川智士（地球研准教授）＋田中 樹（地球研准教授）＋渡辺一生（地球研プロジェクト研究員）＋蔣 宏偉（地球研拠点研究員）＋王 智弘（地球研プロジェクト研究員）

編集●王 智弘

（下の写真、右から）
やすなり・てつぞう
専門は気候学、気象学、地球環境学。地球研所長。二〇一三年から地球研に在籍。
たなか・うえる
専門は境界農学。研究プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」リーダー。二〇一二年から地球研に在籍。
わたなべ・かずお
専門は農学、地理情報学、東南アジア地域研究。研究プロジェクト「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」プロジェクト研究員。二〇一三年から地球研に在籍。
じゃん・ほんうぇい
専門は人類生態学。研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクト研究員。二〇一〇年から地球研に在籍。
いしかわ・さとし
専門は水産学、集団遺伝学。「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」プロジェクトリーダー。二〇一二年から地球研に在籍。
おう・ともひろ
専門は資源論。研究プロジェクト「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障」プロジェクト研究員。二〇一三年から地球研に在籍。

いろんな分野の専門家が開放的な空間に集う地球研。勤務時間が終われば、プロジェクトの所属を越えてお酒を酌み交わすこともしばしば。そんなときにおもしろいアイディアを思いついたり、スケールの大きな構想が生まれたりすることも。そんな研究者の内輪の語らいに耳をかたむける新しい企画です。あまりお目にかけることのない、研究の舞台裏をお伝えします。
研究者の秋は構想の季節。話題はやがて研究助成の公募になり……

石川●そろそろ研究助成の募集が始まりますね。ぼくがいま考えているのは「シーレーン」。インド洋のシーレーンの価値を歴史的に見直す企画があってよいと思っています。
田中●アフリカ、中東、南アジア、東南アジア、東アジア、日本を結ぶ……。

海のシルクロードを動植物の分布から捉え直す

石川●物流や海流構造をふくめて、ヨーロッパ、中東、南アジア、東南アジアをつなぐシーレーンを考える。
田中●かつての「海のシルクロード」？
石川●そう、海のシルクロードの価値を、生態学的、生物学的、社会学的な側面で捉え直す。シーレーンを中心にグローバルヒストリーを再構成することで、まったくちがう世界観を形成できると提案する。
安成●それはよいと思いますよ。
石川●ぼくが長年温めてきたテーマです。民博（国立民族学博物館）の人たちとも「いっしょにやろう」といっている。田中樹さんにも加わっていただきたい。あと、京大東南アジア研の人とか。

安成●いくつかのテーマが考えられるが、これまで取り組まれてきた研究と競合するのではなく、むしろ補完するものになるとよいと思いますよ。

石川●すると、一度研究会をしなきゃいけない。文化人類学や、生物の遺伝集団に関係している人もやってくれると思う。
田中●ことしの3月にインドのケララ州の高地部のイドゥッキ県に行ってきました。「カルダモン」はスワヒリ語で「イリキ」。おそらくアラビア交易でことばが伝わって、カルダモンと土地の名前がかぶってスワヒリ語に転化した。遺伝子分析をすると、ヒトの動きや通商の歴史もみえてくるかも。陸域も海域もふくめた複合的な研究ができると思う。
石川●ヒトとともに生物も移動している。たとえばニワトリのルーツの研究者などにもはいってもらうとよいかもしれない。
田中●現に、インド起源のゼブ牛は、アフリカ全土にいるのですよ。いつ渡ったのか、どのような系統があるのか、遺伝子分析の専門家がいたらおもしろい。
石川●この類の研究って、ほとんどされていない。インド洋はほとんど手つかずです。アジアと東アフリカとは、文化的、社会的につながっていたが、環インド洋でつながる世界観の研究は、ものすごく遅れている。

南インド・ケーララ州のカルダモン農園。天然樹を残しつつカルダモンを植栽（田中 樹撮影、2015年4月7日）

世界史を組みたて直して文明の未来を考える

安成●もともとアジアとインドとは、夏と冬のモンスーンを介してつながっている。
田中●海流もあるし、風待ちもするしね。これは新しい研究領域の開拓を求める公募にピッタリではないですか。問題は、どういうタイトルにするかです。
石川●いまは「シーレーン」かな、と思うのです。環インド洋とすると閉じてしまう。東アジアまでつながっていることをシンボリックに表すことばとして、「海のシルクロード」か「シーレーン」か。
田中●「旧世界」ですね。
蔣●鄭和（ていわ）が航海した道ですね。明の永楽帝が15世紀初頭に東南アジアからインド洋にかけて派遣した大艦隊を率いた鄭和。
田中●鄭和の航海では、インドのコモリン岬で中国の影響圏と中東の影響圏とにきれいに分かれている。もちろん越えるものもあるのだけど。
石川●マラッカ王国ができたのは、鄭和のバックボーンがあったからともいいますね。
蔣●それは伝説です。（笑）
安成●近代において、東アジアがアジア全体を支配しなかったのは鄭和が航海を止めたからだと。ヨーロッパはいわゆる大航海時代に継続して世界に進出したが、アジアは鄭和の大遠征にしても中国の事情で、「そんなの、もういい」と。（笑）あれがひとつの限界だった。
蔣●原動力がなかったのですよね。
田中●ヨーロッパが大航海時代を迎えたのは、域内であるていど国境が確定して互いに競う場面が少なくなったから……。
安成●海に出るしかなかった。
石川●オランダやスペインは、遅れて進出することになったことも、理由でしょう。
田中●ヨーロッパは、お国の事情が安定化したから、思い切って出られた。当時の中国にそのような状況があったかどうか。
石川●ともかく、グローバルヒストリーはつくり直されるべきだと思うのですよ。
田中●西洋中心の世界観ではなくて、中華やアジアの視点からもですかね。
安成●そういうグローバルヒストリーをベースに、文明の将来を考える。

自然との関係性から文明史を描き出す

石川●18世紀後半までの船は帆船ですから、人間の行動は風の向きや潮の流れなどの自然との関係性のもとにあったはずです。人間の文明は人間だけでつくり出したのではない。自然との関係性のもとで人間の歴史ができあがっていることをもう一度見直すべきだし、それを描き出せたらね。
田中●これに関連する古環境・古気候の復元との融合もおもしろいですね。
石川●こういう視点を古環境の海洋学者に話したら、彼らはできないと。したくても、傍証がなければできないと……。
安成●ただ、海洋は証拠が残らないからね。
石川●だから、情報をくれたら、それをベースに組むことはできると彼らはいう。
安成●たとえば古気候学や古環境学の分野だと、地球研にはPAGES（Past Global Change）の中塚武さんや縄文時代の生業の変化を調べる羽生淳子さんのような考古学者がいる。そういう人たちが年輪や遺物から証拠を集めていて、いろいろなエビデンスが出てくる。いわば証拠とデータがあるから、おもしろい。しかし、海洋にはない。
石川●ない、なくなってしまう。だから、むしろ生態系から海洋の状況を知るためのデータをくれと。いろいろな生物の分布について、「こうつながっているよ」というデータがあれば、過去の海況を再現するモデルはつくれると。

風も海流もいまとちがっていた

田中●たとえばパンノキという植物がありますね。あれは実生から繁殖させるのはむずかしくて、古代の人は苗をもって移動した可能性がある。原産地はオセアニアとも東南アジアともいわれていますが、それが南太平洋から東アフリカまで分布している。帆船での移動ですから、苗を運んでその土地に定着させるのはすごくむずかしかったはずです。

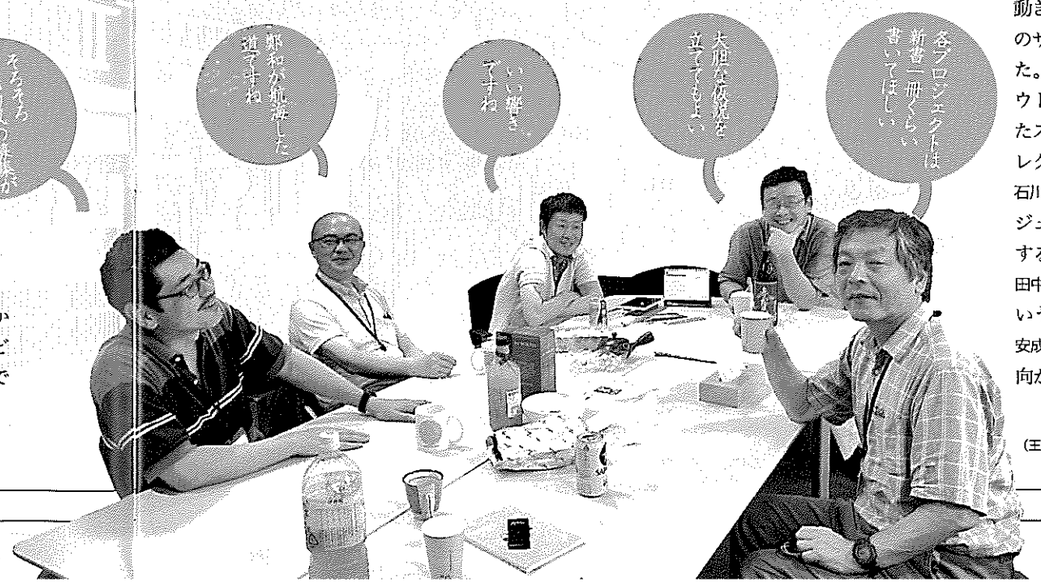
しかも、かならずしも主食ではない作物。それを後生だいじに海岸伝いに持って行った。もちろん、とくにサンゴ礁の島では、カヌーをつくる材木としても貴重な材ですが、もしかするとかなりダイレクトに行ける風や海流の環境があったかもしれない。
石川●ぼくもそう思います。
田中●現状では説明できなくても、傍証を集めることをつうじて、大胆な仮説をたててもよい。
安成●海洋を研究するとしたら沿岸かな。
田中●沿岸域とその周辺の陸域を調べるのは、けっこうおもしろいのではないかな。
王●つまり、海流や風といった条件が今日とはちがっていた可能性があるということですね。
石川●そう、あるていどの期間、いまとはちがう海流系や風系があったのではないかというのが、ぼくの仮説です。
渡辺●それって、「地球シミュレータ」では研究されていないのですか。
石川●彼らも「情報がない」といっている。
安成●国際的な海洋掘削船をつかった研究では、古モンスーン、古環境に着目している。オマーン沖のアラビア海では、夏と冬とでまったく反対方向の強いモンスーンが吹くからです。それが湧昇流を引き起こして、海のプランクトンや生物のあり方まで変えていた。だから、プランクトンの化石には冷たい系統のものと暖かい系統のものとがあって、底生性と表層性とではっきりとしたちがいがあった。そういう事実をベースに過去のモンスーンの強弱を探るというODP（Ocean Drilling Program）のプロジェクトがありましたね。

海洋でも風の強弱、方向のちがいが、湧昇流を通じて生態系を変えるという働きをしていた。そういう典型的な実例があればね。

インド洋を中心とする世界観をつくる

田中●これは、まじめに研究の設計しましょうよ。大きなフレームと軸を決めれば、分担して情報を掻き集めることはできますから。
石川●マダガスカルとアジアの連携の研究や、アフリカ、アジアの魚類相やは虫類の集団遺伝学をしている人もいる。うまく組めると思います。
田中●では、私は陸域を担当します。（笑）
渡辺●紅海のイカンビリスの研究者がいます。
石川●カタクチイワシのイリコの研究ね。
渡辺●その方は香木の交易もされていますよ。
田中●交易というのは、当時の経済と資源の動きを押さえることになる。オマーンの南のサラーラは、かつては乳香の積出港だった。イェメンの北とオマーンの南、ハドラマウトという地域は、インドネシアを支配したスルタンの系譜につながる。だから、ダイレクトに交易関係と支配関係があった。
石川●長田俊樹さんの（インダス文明）プロジェクトにも、つながりがあるような気がするのですよ。
田中●人間文化研究機構（以下、機構）的にいうと当時のインド拠点にも関係する。
安成●だから、機構のインド拠点を活かす方向があると思いますよ。

（次ページにつづく）



（王 智弘撮影）

新しい研究構想で盛りあがる

東アジアからインド洋に拡がる 自然と文化の綾を再発見しよう

白い帆いっぱいに風を受けて走るタンザニアの島嶼部ザンジバルのダウ船（田中 樹撮影、2013年8月20日）

石川●インダスからアジアをフィールドにした長田さんの研究成果をつかわない手はない。ぜったいにおもしろいと思う。

田中●そこまで遡って、研究者やスタッフを羅列すると、ものすごい数の業績になります。新しい研究領域をつくる充分な説得力もあります。しかも地球研のアセットを活かせるし、なおかつ学問としても新しい。

石川●インド洋を中心とする世界観をつくるなんて、これまでないことですね。つねに大西洋、太平洋のフレームで議論されてきた。でも、日本って、じつはインド洋を中心とする交易に大きな影響を受けていた。

田中●それは、祇園祭をみればわかる。(笑)

石川●その重要性を問い直すことが、現代的にも重要な気がするのですよね。

中国、インド、アラビア系の人と文化が織りなす世界

田中●中国だって、皇帝に献上されたアフリカのキリンが中国の伝説の麒麟と結びついて、「現実にいたのか」という話になる。

蔣●その当時は、太平洋で貿易をやろうという視点はなかった。(笑)

田中●古くて新しいインド洋ですよね。

渡辺●西洋人がインドネシアにくるまえは、商人のほとんどは中国人で、島々の物流もすべて中国人がしていたというからね。

石川●でも、その中国人というのが微妙。

田中●漢民族ではない可能性がある。

石川●漢民族ではなくてイスラム系民族。鄭和もイスラム教だったといわれている。

蔣●貿易をしているのは、いまもほとんどがアラビア系の商人の末裔ですよ。

石川●それでも、中国人として扱う。

田中●「みんな漢民族だ」といって漢民族のフレームを拡げようとする。(笑)

渡辺●台湾とか南のインドネシア、フィリピン、パプアニューギニア、イリアンジャヤ、あのへんにもすべて進出している。

田中●中国の海南島の人たちの言語は、ベトナム南部のチャンパのことばだと蔣さんが言っていましたね。

安成●南側はそうだね。

田中●チャンパの出自は、もとはインドネシアやインド、アラビアにつながる人たちなのかな。

石川●インドが主でしょうね。

田中●インドのサンスクリット文明はインドネシアに行って、陸伝いにはベトナムに至った。陸のルートと海のルート、そういう文明がインドシナ半島から中国の南の全域を支配していた時期があった。

南シナ海に浮かぶ海南島は民族と文化のサラダボウル

石川●チャンパは、インドシナ半島東岸、ベトナム中部のフエから南にかけてのインドネシア系のチャム人の王国で、17世紀まで存続している。中国は林邑（りんゆう）とよんで中国文化の影響のもとにあったが、3世紀末まではインド文化を取り入れた社会を形成していた。この存在感は大きい。

田中●あの強大なアンコールのクメール帝国と戦っていたのがチャンパですからね。

蔣●海南島の南には、いまもアラビア系の海賊の末裔のような人たちがいます。

安成●あの小さい海南島も、北と南とでは文化も民族も、気候もまったくちがう。

蔣●中央が亜熱帯と熱帯の境目ですね。

安成●1984年に海南島の北の海口市から、島の中央の五指山を越えて南の三亜市まで行きました。1日の行程で、植生から気候までまったくちがった。1月末に行くと北側まで寒波がきていて、寒くて天気も悪い。ところが、五指山の峠を越えた途端に熱帯。オオーッ。三亜市はいまやリゾート地です。(笑)

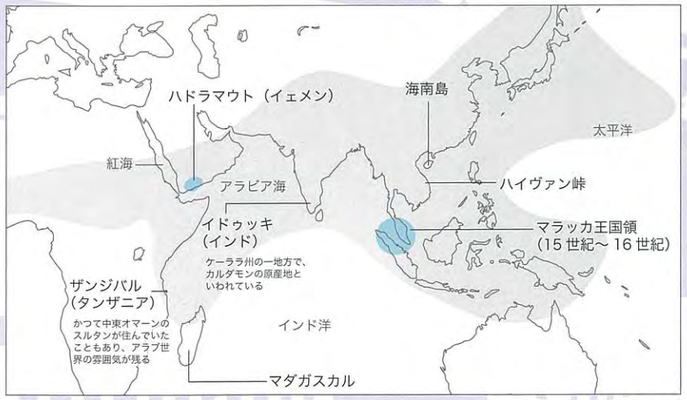
田中●ベトナム中部のフエからその南のダナンに越えるハイヴァン峠がまさに境。

渡辺●標高1,200メートルほどの山が南北を遮っていて、雨の時期までちがいますね。

新書で研究成果を世に問う

安成●石川さん、新書を書きませんか。

石川●ええ、書こうかなと思っています。新書を書くのはすごく重要だと思います。ぼくもいま「エリア・ケイパビリティ」という新書を書きたいと思っているのです。



モンスーンの影響を受ける地域（灰色部分）

安成●各プロジェクトは、まとめの段階で、新書本1冊くらいは書いてほしい。

石川●いまプロジェクトのコンセプト本を日本語と英語バージョンをあわせたかたちで書いています。たぶん来月には発行します。アップルをつうじてiTunesで世界に発信します。

安成●それもよいのですが、ぜひ新書本も。

石川●できれば書きたいです。

安成●地球研が属している人間文化研究機構の佐藤洋一郎理事が窓口で、平凡社新書でシリーズを出すというしくみができますから。

石川●『エリア・ケイパビリティ――地域可能性を耕す』というタイトルはどうですか。

王●もうサブタイトルもできているのですね。(笑)

石川●書きたくても、出版社がOKしないと書けないものですから。

安成●とりあえず出すことがだいじ。

石川●重要です。1人で新書を書ける機会はめったにない。書かせていただけるのでしたら、喜んで書きますよ。

研究プロジェクトのリーダーは、全員が新書を書くべし

安成●機構の存在感を高めようと佐藤さんががんばって、平凡社と組むことになった。各プロジェクト、とくに終わりかけのプロジェクトにはぜひ書いてもらいたい。論文や本もだいじだけど、新書は多くの人が目にする機会がある。

石川●最近の中学や高校の夏休みの宿題は、「新書を1冊読みなさい」。その感想文や意見書を書くのが中心になっている。ぼくの世代だと鶴見良行さんの『バナナと日本人』や、村井吉敬さんの『エビと日本人』の影響はものすごく大きい。

安成●影響を受けた人はたくさんいる。

田中●でも、あれでいいのかとも思った。(笑)

石川●そう、「これでは足りない」と思いました。この視点や、こういう研究がたりないことがよくわかった。

ザンジバルの海岸。地平線の向こうは、アラブやアジアの世界につながる（田中 樹撮影、2012年11月24日）

安成●その点でも、新書本はよいと思う。

石川●やはり文系の人が書いたものだからです。水産学や漁業学からすると、彼らの漁業技術の記述はやはりたりない。でも、漁業技術者が書くと技術本になってしまう。それではだめで、いまうちのプロジェクトでは、それを超えようとタイとフィリピンの漁具漁法図鑑をつくっています。

田中●よし、書きましょう。

安成●書いてくださいよ。地球研のプロジェクトリーダーが、みんな新書を書く。

石川●1冊書くのを、義務にしてもいい。

安成●プロジェクトは、新書本を1冊書く。

石川●そう思いますよ。書かせていただけるならありがたいですよ。英語の論文ばかり書いたって読者は少ないんだから。

安成●地球研の初代所長の日高敏隆さん（故人）はご本人が地球環境を研究していたわけではないが、新書本をふくめてあれだけの本をお出しになった。世のなかの人はよく知っている。「日高先生がおられた研究所ですね」と。日高先生の役割はすごくあった。日高先生に負けないことをしないとね。(笑)

石川●気象学では負けないですよ。

物流に閉じない「海のシルクロード」の動植物や自然環境への視点

安成●じつはこの9年間、気象学ではなく気候学の教科書を出すよう某出版会からいわれつづけていて、いまも待ってくれています。

気象学の教科書はたくさんあるのですが、気候学の教科書は少ない。気候学の教科書にも立派なものはあるのですが、すべて古色蒼然たる気候学なので、これを乗り越える教科書を書きたい。8割から9割はできていて、あともう少し。(笑)

石川●インド洋の古気候も書き加えて、出しましょう。

田中●インド洋は北極圏に突き抜けていない、閉塞海域だけにおもしろいと思います。

安成●インド洋はおもしろいが、シーレーンは少しキナ臭くてね。(笑)

石川●でも、「海のシルクロード」というと物流ばかりを考える。もっと生物的な部分や環境的な部分を入れたいと思う。

安成●「新インド洋文明論」の感じですね。

石川●「インド洋」というと、文科省が「なぜ日本がインド洋の研究を」といってくる。

安成●インド洋は日本にとってだいじですよ。

「モンスーン文化論」でいこう！

石川●東アジアとインド洋とのつながりを表すシンボリックな名前がほしい。

安成●ぼくの視点は大気になってしまうけど、やはりモンスーンですよ。

石川●モンスーンだったら、インド洋も東南アジアも東アジアもすべて入りますね。

安成●まさに、モンスーン文化論。

石川●「モンスーン文化論」、いいですね。風も海流も、文化も入るから。

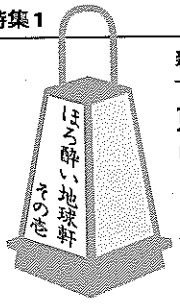
石川●しっくりきますね。やりましょう、「モンスーン文化論」。すごくいいですよ。

渡辺●いい響きですね。

石川●みなさんもイメージがパッと浮かぶ。「モンスーン文化論」の構築。

安成●ぼくもある新書に提案書を出したところだけど、いろいろ注文があって、もう少しこのへんを直してくださいと。ぼくは「風

（次ページにつづく）



新しい研究構想で盛りあがる

東アジアからインド洋に拡がる 自然と文化の綾を再発見しよう

土論」が好きだから風土論的な視点を入れたけど、いまの海洋の問題をふくめてもっと広い意味の風土論で展開したい。

田中◎安成先生、担がれます？

石川●「モンスーン風土論」の構築にむけた研究。決まりましたね。

田中●ほかの提案と競合されていませんか。

安成●その新書は、自然と文明とをどう考えるかがテーマで、かならずしもモンスーンにこだわらない。だけど、ぼくはモンスーンがらみで書きたい。

自然と文化から インド洋世界に迫る

石川◎まず研究会を開きましょう。私と田中樹さんの知りあいなどで研究会を開いて、今後どう取り組むかと。

安成●成果としての新書にも期待する。

石川●ぼくの博士論文のなかに、そのコンテンツがあるのですよ。インドネシアの大ウナギは、遺伝的にすごくユニークな集団です。ところが、その遺伝子がマダガスカルに25パーセントもある。おそらく、一度分布を拡げたあと、インドネシアで孤立した遺伝子集団がもう一度到達するようなイベントがないと説明がつかない。

安成●それはおもしろいな。

石川◎ウナギが分布を拡げるには、おそらく卵やレプトケファルス幼生期に、海流で集団的に運ばれるイベントがないと、新しいところには到達しないはずです。

安成●これに関連するヒトの文化は？

石川◎植物とか海域の部分ではむずかしい。ただし、は虫類や植物で同じような遺伝的パターンをもっている種があります。おそらく、東南アジアからマダガスカル、アフリカ南東部に到達する海流が形成された時期があったのではないかと。

安成●むしろ自然のほうによりフォーカスするのだったら、モンスーンの生態系でしょう。「モンスーン生態系と文化」とか。

石川◎生物の集団的つながりと、文化的なつながりをあわせてみたときに、環インド洋やモンスーン世界という世界観がどういう自然と人間とのかかわりでつくられたのかを構築できるのではないか。モンスーンと、人間と、自然という世界観ですよね。

安成●「モンスーン文化論」というと、人間の文化が中心になるイメージがあるから、それでおもしろいじゃない。

王◎風土論はどうですか。

安成●「モンスーン風土論」、これもいい。

石川●たぶん、傍証としてそういう時代があったことが証明できる。

安成●自然の生態系としてつながっていることを最初にいいましょう。

次は決起の研究会だ

田中●おもしろいのは、モンスーン地域って、かならずしも湿潤地ではないこと。乾燥地と湿潤地とをつないでいる。

安成●モンスーンは、ある意味で乾燥地域と湿潤地域との境目をつくり出します。

田中◎媒介でもある。乾燥地の風土と湿潤地の風土ってまったくちがうといいながら、そこに共通項もある。

田中◎石川さん、看板がすっきりと出ましたから、やるしかないですね。

石川◎やりましょう。早く召集かけます。

田中◎まずコンセプトをつくる研究会をしませんか。

安成●ネタはそうとうある。お二人のネタに、ぼくのネタを入れてね。

田中●構想を擦りあわせましょう。決起集会的な研究会をしましょう。

安成●いろいろなことがアジア・モンスーンにからみますから、楽しみです。

（2015年9月3日18:00〜21:00 地球研にて）

南インド・ラーメシュワラームの海岸（田中樹撮影、2015年4月8日）